

神学校だより

September 2021 VOL85

日本バプテスト聖書神学校 JAPAN BAPTIST BIBLE COLLEGE



◇ 校長の机から ◇

校長 斉藤 秀文



ある日曜日、私は10年程前から教会に来られている一人の男性(未信者)がある新聞記事を見せてくれました。その記事は、「古代ユダヤ人 豚を飼育?」でした。

その内容は、紀元前10世紀～紀元前6世紀のエルサレムの遺跡から子豚の全骨が見つかったというものでした。同じ場所からは、調理用の土器も見つかったので、考古学者は「ユダ王国時代、エルサレムの食生活はこれまで考えられてきた以上に多様だった可能性がある」というものです。更に続けて、「ユダヤ人が戒律を厳しく順守し始めるのはもっと時代が下ってからとされていると指摘し」と結論づけていたのです。

そこで私は彼に、「ユダヤ人の調理場で子豚の全骨があったとしても、紀元前1400年にモーセと律法が存在した聖書記事とそれ以降、ユダヤ人たちが律法を厳格に順守しようとした事を否定する理由にはならないと思います。」と伝えました。

更に私は、続けて「想像してみてください。当時、ユダヤ人だけでなくユダヤ社会には在留異国人もいました。また、律法が無視されたり、忘れ去られたり、偶像崇拜が持ち込まれた時代がほとんどでした。だから、その様な律法を破る人、ユダヤ教の律法と関係ない生活習慣を持った人もいた事は想像できます。その様な事はいつの時代でも起こっている事柄です。だから、そこに子豚の骨があることも想像できます。」すると彼は賢い人で、少し思いを巡らせていましたが「分かりました。確かにそうかも知れませんが」と想像力を働かせて私のことばの意図を理解してくれたのでした。

この新聞記事から二つのことを考えました。一つは、このように私たち人間は、いつも自分にとって不利になるか有利になるかによって判断し、言葉にしていると言う事についてです。私たちは聖書を人間の常識や科学——これを全く無視してよいと言っているわけではありませんが——を絶対的基準として判断してはならない、ということです。私たちキリスト





者は、目に見えるところに従って判断したり、言葉にしたり、行動したりする者ではないということです。むしろ

私たちは、見えないお方に従って歩みます。キリストを見ては無いけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、言葉に尽くせない、栄えに満ちた喜びに踊っているのです(Ⅰペテロ1章8節参照)。まさに聖書に生きるということは、聖書を絶対的基準にして全てのことを判断するという生き方です。それは目に見える事柄に囚われたり、支配さたりしない思考と行動をとるということです。

二つ目は、想像力を人間関係の中で働かせることができないならば、互いに理解し合うという交流はなくなってしまう危険があるということです。一方的に自分の考えを発信し、オウム替えしの自己主張(伝道においても言える)では、声は伝わりますが、それは単なる不快な「音」でしかないかも知れません。発信者の意図は、その人の心には届かないのです。

現代は、意思疎通がなかなかうまく行かない時代だと言われます。人間関係が難しく、誤解が生じたりすることが多くなったと感じます。これは、「思いやり」の欠如の結果ではないでしょうか。

しかし私は、人がアダムとエバの堕落以後、いつも「良い悪い(善悪ではない)」の判断基準が自分の狭い見識と損得勘定によってしかできない者となってしまったことの結果だと考えます。それでいて、人は、「自分は全部解っている。」と言うのです。それは、エデンの園で、エバがサタンから誘惑されたとき、善悪を知る「その木から食べるとき必ず死ぬ」と言われた神の言葉よりも目の前の木の実が自分にとって、「食べるのに良さそうで、目に慕わしく、…好まし」と判断したのです。この堕落

が、神の言葉よりも自分の目で見えた(体験)印象で、判断し、行動した姿にあると考えます。

墮落した人は、ほとんどの場合、親しい隣り人であっても自分と異なる立場や意見、生活、気持ちを持っていることを想像しないのです。もしかしたら想像できないのかも知れません。それ故、人は自分と意見が異なったり、人の失敗や弱さを見つけたとき、一方的に攻撃する(しかも匿名で)のではないのでしょうか。自分の語ったことが、どれほど他の立場や状況にある人を否定する事になるかを想像することができないのです。

私が問題にするのは、「人の価値基準は、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の手で触つ



たもの、つまり目に見えるもの」だけが、真実であり、現実であり、価値があると判断

することです。

この二つは、想像力の欠如という点で共通しております。私たちは、見ていないキリストと見えない神を愛し信じる者です。これは、聖書を私たちの全人格の中心とし、土台として、自分の気持ち、知識、常識を脇に追いやる、と言うことです。実はここから他者に対する思いやりを持つ事ができ、それが想像力となるのです。

ですから、聖書を基準とし、神の御主権に信頼し、キリストの救いを喜び、御霊の導きを受



け止める事のできる信仰の豊かさ(別の表現で表せば「想像力の拡大と深み」)を持つ事ができるようにと願うのです。

そんな全人格的な霊的洞察力を養い育てる事のできる神学校である事を願います。

「主にあって集まる恵み」

浦和聖書バプテスト教会

川島 実成

コロナ禍になってから、首都圏の人々は大人数で集まること自体を悪いことと考えています。その為、神学校卒業式に大人数が集まることを、快く思わなかった方もいたかもしれません。

そうした状況の中、今年度の神学校卒業式は行われました。感染対策がきちんとなされ、「佐久平交流センター」という大きなホールの会場でした。そこに、諸教会の兄姉が集まり、会衆賛美、神学生の特別賛美、みことばの説教、校長訓話など、これまで通りのプログラムが全て行われたのです。それは、非常に感謝なことだったと思います。

けれども、今回の集まりで私が教えられたことは、そうした卒業式のプログラムとは別にあります。それは、主において兄姉が集まること自体が、大きな恵みであるということです。以前の私は、フェロシップの集まりに参加できることは当たり前で、集まること自体を恵みとは受けとめていませんでした。それよりもむしろ、集まった後の特別賛美、あかし、みことばの説教などを恵みと受けとめていたのです。

確かにそれらは大きな恵みです。ところが、久しぶりに主にある集まりに参加した時、私は自分の心の中に大きな喜びがあることを感じました。今まで気がついていませんでしたが、実は主において兄姉が集まること自体が大きな恵みなのです。これはコロナ禍を通過して来たからこそ知ることができた恵みか

もしれません。卒業式を通してそのことに気がつき、6名の卒業生を祝福することができたことは、私にとって特別なひと時でした。このような素晴らしい主にある集まりを準備してくださった、教師会や管理委員会の先生方に感謝します。コロナが終息し、一日も早く群れの集まりが再開されることを心より願っています。

〈見よ。なんとこの幸せ なんとこの楽しさだろう。兄弟たちが一つになって ともに生きることは。〉(詩篇133:1)



-卒業論文 要旨-

「エペソ人への手紙 6 章 4 節に見る聖書的父親像とその実践」

井垣 勇基

本論文は、「聖書的父親像とその実践」について、使徒パウロが記したエペソ人への手紙6章4節から研究したものである。エペソ人への手紙6章4節は、コロサイ人への手紙3章21節と同様、新約聖書において唯一、父親宛てに記されたみことばである。この箇所に記されている父親の働きを明らかにすることを中心に解釈を行い、パウロが記した意図を明確にすることを目標に取り組んだ。



現代において、クリスチャンホームで育った子どもたちが、大人になって信仰から離れるケースが相次いでいる。その理由の一つは、「社会性」—非聖書的な—を謳うこの世の影響である。この世の中で重んじられるこの言葉の背後には、ルソーの性善説、更には啓蒙主義が潜んでいる。例えば、こうした近代精神に教会とキリスト者が、知らず知らずのうちに影響を受けて、親が聖書に従って子どもを懲らしめると言うことが言われなくなったり、また、子の交友関係に無関心になったりする(箴言 13 章 20 節)というようなことが、信仰継承という点で、課題になるのではないだろうか。

現代において、クリスチャンホームで育った子どもたちが、大人になって信仰から離れるケースが相次いでいる。その理由の一つは、「社会性」—非聖書的な—を謳うこの世の影響である。この世の中で重んじられるこの言葉の背後には、ルソーの性善説、更には啓蒙主義が潜んでいる。例えば、こうした近代精神に教会とキリスト者が、知らず知らずのうちに影響を受けて、親が聖書に従って子どもを懲らしめると言うことが言われなくなったり、また、子の交友関係に無関心になったりする(箴言 13 章 20 節)というようなことが、信仰継承という点で、課題になるのではないだろうか。

もちろん、子が信仰から離れる原因を親や、家庭だけに求めるべきではなく、また、聖書をよりどころに、心を尽くして、祈りのうちに子を導いたとしても信仰から離れることもあるだろう。それは、最終的には本人の決断、責任であり、また、ご主権を持たれる主の御手の中にあることである。しかし、少なくとも、キリスト者が神から委ねられた子どもたちを導くために、できることがあるはずであるから、何をし続

けて行かなければならないのかを、改めて聖書に尋ね、向き合うことは大切である。

以上のことから、本論文では、中心聖句として、エペソ人への手紙6章4節を取り上げた。この研究を通して、家庭の霊的なリーダーである父親が、どのような役割を神から委託されているのかを学ぶことで、聖書的な父親像を知り、教会内で父親との関係に悩む子どもたち、子育てに悩む父親たち、そして彼らを導く教会の働き人に適用することを目指す。

本論文は次のように構成される。

1章において、エペソ人への手紙の緒論を記し、ギリシア語本文(ネストレ 28 版)と新改訳 2017 の翻訳の比較、梗概の作成をもって、書簡全体の繋がりを確認した。中心聖句の前後の文脈(5 章 15 節～6 章 9 節)のギリシア語本文の品詞分解を行い、語句の意味を一語ずつ調べ、本文を私訳し、新改訳 2017 と比較した。

2章においては、1章の内容を基に、中心聖句の前の文脈から、段落ごとに解釈した。特に本論文のテーマである「父」について記されている部分の解釈に重点を置いた。具体的には、御霊の人(5 章 18 節)、父なる神(5 章 20 節)、夫(5 章 25 節)、親(6 章 1 節)を解釈し、聖書的父親像の多角的な理解を試みた。

3章では、エペソ人への手紙6章4節に記されている否定的な面(「子どもを怒らせてはいけません」)と肯定的な面(「主の教育と訓戒によって育てなさい」)を取り上げた。また、現代的な課題として、聖書的視点に基づく虐待と懲らしめの違いについて幾分か考察した。

本論文の結論の要約は以下の通りである。

- 1) 父なる神こそ、聖書的父親像の原点である。
- 2) 聖書的父親像の否定的面とは、子どもたちを怒らせないようにすることである。これは間近で刺激を与えて、怒りやねたみを起こさせることを意味して

いる。パウロが敢えて、「怒り」を選んだ理由として、これが、権威に直面した罪深い心が抱く感情であり、またこれが神から離れる原因となることが考えられる。子どもを怒らせないようにするためには、父親自身がキリストの赦しによって、自らの怒りを制することが必要である。

3) 聖書的父親像の肯定的面とは、父なる神がなさるように、子どもを教育し、訓戒することである。

「教育」は子どもを成熟に導くために鞭を加えてしつけることを意味し、「訓戒」はことばをもって教え、子どもの心の中に置くことを意味している。こうした教育と訓戒を施しつつ、身体を労わるように、子どもを育てることが必要である。

4) 父親はすべてのものに仕える者となられたキリストを恐れ、ならいつつ、「互いに従い合う」ことを基盤に権威を用いて、子どもをしつけとことばによって育てる。言うなれば、父親はコントロールではなくコミュニケーションを通じて、その権威を用いていくのである。そのように、決して一方的ではない親密な関係の中で、妻を愛し、子どもを育てていくことこそ、パウロが記した聖書的な父親の理想的な姿である。

「御霊による心の割礼」

堺 希望

本卒論は、ローマ人への手紙 2:29 に書かれている「御霊による心の割礼」の意味を解明することを目的としている。



クリスチャンは「聖化」の過程において、日々キリストに似た者として栄光から栄光へと変えられ続けている。だが、「成長している」あるいは「前進している」と評価する基準はどこにあるのだろうか。現実におい

て、聖化という歩みが具体的にどのようなものであるかは、人それぞれのイメージがあるかと思う。ある人にとっては持続的に実践を行えることであるし、ある人にとっては自己の内面を神にさらけ出すことである。また聖化は御霊によって成される働きであることを知っている一方、私たち自身の意志も存在している。それゆえに「成長」は人間には測ることが出来ないという人もいる。それらの価値観は現実におい

て、許容量を超えた出来事に個人個人がぶつかることを通して形作られていくのだろう。私たちは皆、成長したいと思っているが、それをどのように判別したらよいのか。何に基

準を置いたら良いのか。そもそも基準を知ることはできるのか。

そのような問題意識から、主がひとりひとりに意図されている歩みを、聖書神学の観点から旧約聖書において神が定められた割礼という儀式が目指していた意味を、「心の割礼」という表現に着目することで示唆を得ようと試みた。

ローマ 2:29 において「御霊による心の割礼」という表現を通して、パウロは真のユダヤ人に関連して、割礼をどのように理解しているかを提示している。そのため、まず割礼の起源となる律法の書、その後預言書を調べ、最後にローマ書の釈義に取り組んだ。

①創世記では、割礼の起源について記されている。ここでは神との契約のしるしとして割礼が定められている。義と認められたアブラハムが(15:6)、その後神との関係において「全き者であれ」(17:1)と神から求められた歩みの現れが割礼である。「全き者」と訳された「タミーム」というヘブル語は、いけに

えの動物において「傷のない」(出エジプト 12:5、レビ 1:3 等)と訳されている語と同じ単語である。その意味は「裏表がない」「ありのまま」という意味である。

ここから、神は義と認められ聖なるものとされた存在に対し、「全き者」であること、すなわち神に対して隠し事のない心を求めておられることが見て取れる。

②その後の律法において、この割礼は儀式として組込まれるが、特に、「心」との関係で言われていることは注目に値する。特にレビ記においては「ネフェシュ」という語の用法から、神が民の心を「無割礼の心」(レビ 26:41)と表わされ、神の前に心が生きていない存在となっていると示している。特にレビ記では、神が無割礼の心を取り扱われようとする時、人はそれに悔い改めて応じていくことが粛々と求められていることが分かる。

③そして預言者は、人が自分自身の心を知り尽くすことができないことを述べる(エレミヤ 7:9-11 等)。人が自分の認識の範疇で自身を聖めようとしても、無意識の悪にまで気付くことはできないことが分かる。

④ローマ書では、律法を所有し行うことで自己満足に陥っていたユダヤ人キリスト者に対し、パウロが真の割礼は「御霊による」「心の割礼」であることを述べる。旧約聖書から述べられてきた割礼は、神の求められている心を現わすものであり、人は自らその状態に至ることはできない。主導は御霊が取り扱ってくださることにあり、それに人が応じていくことによって成し遂げられる。

これらのことから、神が人に求めておられるのは、その心が神の前に生きるようになることであり、神の前に生きる心とは裏表のない一つ心としての生き方であると言える。だが人には自分自身で知覚できない無意識の領域があり、それを自力で変えることはできないし、本当の自分の状態に気づくこともできないのである。

無意識の、本当の自分に気付かせてくださるのは御霊の働きであるが、人間にとってその気付きは割礼の如く、心を覆っているものを切除されて出血するような苦痛を思わせる。気付かされた自分の姿を受け入れることは今まで自分だと思っていたものを否定する自己否定を意味するからだ。

神はあらゆる出来事、苦難を通して人を「全き者」に導こうとされている。人が認識していた「自分」のみならず、むしろ意識していなかった無意識の領域まで神が「全き者」に至らせようとする聖めなのである。御霊の与えて下さるその気付きに対して、応じていくことが人のできる唯一のことである。

神はあらゆる出来事、苦難を通して人を「全き者」に導こうとされている。人が認識していた「自分」のみならず、むしろ意識していなかった無意識の領域まで神が「全き者」に至らせようとする聖めなのである。御霊の与えて下さるその気付きに対して、応じていくことが人のできる唯一のことである。

神はあらゆる出来

事、苦難を通して人を「全き者」に導こうとされている。人が認識していた「自分」のみならず、むしろ意識していなかった無意識の領域まで神が「全き者」に至らせようとする聖めなのである。御霊の与えて下さるその気付きに対して、応じていくことが人のできる唯一のことである。

「礼拝の本質～教会の宣教の働き～」

澤みのり

・研究の動機と目的

本論文は、第一に、今日に見られる形や方法論にこだわった礼拝が、概念や伝統から解放されることを目的とする。第二に、礼拝のスタイルが、歴史の流れによって変わっていく部分があったとしても、また、国や文化による違いがあったとしても、決して変わっていないもの本質を見出すことが本論文の目的である。



・研究の背景と問題提起

礼拝とは、私たちの礼拝の対象である神の理解が根底にあり、私たちの信じる神の理解によって礼拝のスタイルは変化する。しかし今日、礼拝の対象の神よりも、礼拝の形式面が問われる傾向にある。礼拝の、目に見えないところの本質ではなくて、目に見えるところの方法論が、礼拝論の中心になって

しまっているように思われる。また、神理解からくるスタイルの違いによって、教会がどのような神を証し、どのように神を証しているのか違いが生まれている。それは、言い換えれば教会の宣教の働きの理解の違いである。

よって、本論文では礼拝の対象である神の御性質から、礼拝の本質を考察する。そして礼拝の第一の目的とは何か、何のための礼拝なのかを見出す。そして、神中心の礼拝と、そこから見られる神中心の宣教とは何かを理解する。

まず聖書全体から、礼拝がささげられている記事を取り上げ考察した。

最後に、今日の礼拝スタイルの課題である、見える化(見えるところから従って礼拝するあまり、見えない方を見失う、まことの神に対する欠陥のある礼拝)と子どもの礼拝出席について考察した。

・考察と結論

礼拝とは

①信仰によってただ神だけにささげられる。しかし神が人に向けた証として用いてくださる。

礼拝は神以外のものにささげられるものではない。それは、人もそうである。礼拝は人に見せるものでも、人のために行うものでも、人を意識して行われるものでもない。信仰者が主だけに尽くし、礼拝をささげる姿は、時に世の人からは理解されず、受け入れられないこともある。

しかし信仰者は人に喜ばれることではなく、神に受け入れられる方を選んだ。礼拝は時に、世の常識ではなく、また世の人が考えるものとは異なり、ただ主である神だけに向かいささげられる

ものである。ナルドの香油をささげた女性の記事にあるように、彼女は人からは非難を受けたが、世界中で福音が宣べ伝えられるのと一緒に証として語られるようにと用いられた。



②宣教の出発点。

礼拝の第一の目的は、ただ神がほめたたえられることであるが、神に礼拝がささげられる時、信仰者は祝福を受ける。そして神からの祝福を受けて、全世界へ祝福の基として遣わされていく。アブラハムは、礼拝をささげた後、地のすべての国々への祝福の基となると約束された。それはアブラハムが全世界に神の祝福をもたらす器となることが約束されたことを意味する。礼拝は私たちに宣教の動機付けを与え、私たちを宣教へと押し出す場となる。私たちは祝福に押し出されて出て行く。私たちは神から宣教の委託を受け、祝福をもたらす神の使者となる。祝福された者が祝福する者となり、神の祝福が隅々にまで深く広くしみとおっていくために私たちは宣教の器として用いられる。

③信仰生活と切り離すことはできない。

アブラハムは、日ごろから神のお取り扱いを受け、神の導きをいただいていた上で、神を礼拝するために招かれた。レビ記の天幕礼拝でささげられるいけにえは、高価な牛の中でも、傷のないもので、完全なものでなければならなかった。それは日常生活の労働で得た多くのお金が支払われたもので、傷の無いように、丁寧に日ごろから育てられたものであった。日ごろから神にささげるために多くの犠牲があったのである。神を礼拝することとは、神を信じて生きていく信仰生活と切り離されて存在するものではない。

④犠牲のともなうもの。

犠牲のともなわない礼拝はない。信仰者は人生を懸けて、時には命さえも懸けて、礼拝をささげた。犠牲というものは本来そう言うものである。痛みのもなわない犠牲はない。神を礼拝し、神

に栄光を帰するというただ一つの目的のために人生を、そして命をささげるのである。

よって、礼拝の本質は目に見えないところにあるのであって、現代の目に見えるところの方法論や、

数、大きさなどで礼拝を批判することは間違っている。私たちも、人の称賛を得ることを目的にして、目に見えるところに励むのではなく、主が見てくださり、覚えていてくださるといふ信仰によってのみ礼拝がささげられることを願う。

「神の愛 ヨハネの福音書 21 章 15 節から 22 節を中心として」

西牟田 恵理也

本論文では、ヨハネの福音書 21 章 15 節から 22 節の主イエスとペテロの愛の問答を主題に、アガペーの愛の考察を行った。論文は 4 章構成で、まず 1 章では、「愛」



を表す 4 つのギリシャ語について、アガペーとフィリアを中心に、辞書的な定義、また、新約聖書での用いられ方について確認を行った。そして 2 章と 3 章では、単純に「愛」と訳される事の多いアガペーの意味を狭義に限定し、その限定された定義の妥当性を考察した。その定義とは以下の 4 つである。

- ① 先行する愛(愛される前から、愛する愛)
- ② 一方向性の愛(見返りを前提としない愛)
- ③ 第一のものとして、選び取る愛(最優先に愛する愛)
- ④ 自己を捨てる愛(自分を低くして、相手を尊重する愛)

父なる神、そして、子なる神である主イエスは、神の愛をもって、このアガペーの愛で人間を愛して下さった。I ヨハネ 4 章 10 節「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」・①②主を愛すことのない、罪人である私たちを、③最優先に選び、④ご自身のいのちを捨ててまで愛して下さる。これが、父なる神の愛であり、子なる神である主イエスの愛だ。一方、私たち自身には、神の愛を行う力はない。そ

の上で、4 章では、本来、神のように愛することのできない私たちが、どのように愛することが出来るか考察を行った。ヨハネ 21 章 15 節での主イエスとペテロの問答は、主イエスは、愛することについて「誰かとの比較」で問いかけられたと解釈するか、「自分の中での主イエスの位置」を問いかけられたのかと解釈するかを釈義する必要がある。まず、前提として、ヨハネの福音書全体を通してヨハネが問いかける神の愛を確認する時、主イエスは、「主イエスを愛すること」について「誰かとの比較」ではなく「自分の中での位置」を問うておられることが分かる。このことは、実際に、この 21 章でのやり取りの結びで、「主よ、この人はどうなのですか」と、主イエスに対する愛を、最後まで誰かと比較して検討しようとするペテロに対して、主イエスが「あなたは、わたしに従いなさい。」と語られていることから分かる。主イエスがペテロに求めておられる最終的なゴールは、ペテロ自身の中での主イエスの位置であり、「あなたは、他の何よりも、私を愛していますか？」に対して、アガペーの愛での返答をすることである。

しかし、それらを踏まえた上で、21 章 15 節には「あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」という意図が含まれているのだ。これは、ペテロがこの時点でまだ完全には、自我が砕かれ切っていない状態であることを踏まえたものだ。ペテロは、大祭司の家の中庭で、主イエスを否定した経験を通して、「私は、他の何よりも、主イエスを愛している。」と言う自分の自我を砕かれた。自分を捨てて、主イエスを第一に愛せない、主イエスを選び取れない自分に気づかされた。しかし、ペテロは、まだ、「②私は、他の誰よりも、主イエスを愛している。」と言う自我は捨てきれないでいた。

そのように、主イエスとの縦の関係に対する自我を打ち砕かれ、なおも、横との比較にすがろうとするペテロに対し、その自らの姿に気づかさせるために、主イエスは、ペテロの目線から語られたのだ。「あな

たは、私のことを第一に愛せないと気づきました。その上で、まだ、私との関係を、誰かと比較しようとするのですか。本当にあなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」と、ペテロの自我を本当の意味で砕くために、語り掛けられたのだ。そして、自分の貧しさ・限界を知り、心砕かれたペテロに対し、主イエスは「私の羊を飼いなさい。」と語り、最後に「わたしに従いなさい。」と命じられたのだ。最終的に、ペテロは、本当の意味で自分の貧しさ、限界を知り、その中で、主イエスの愛を知ること、その愛に倣うことが出来た。これはペテロ書からも分かる。私たちが同じである。神のアガペーの愛は、主イエスの愛を知り、主イエスに委ね、変えて頂くことで行う「新しい戒め」として、受け止め、目指すものだ。自分は愛することのできないものだけれど、罪人である自分をも赦し、愛して下さった主イエスなら、出来るように変えて下さる。そのように信じ歩むのがキリスト者の歩みであり、幸いである。



創世記 4:25-26 の箇所から祈りは、神から離れた状態から、立ち返り、神を求めるときに始まったと

考えられる。自分でどうにかできると思っている時は、神を求めたことはない。人間は神の御前にあつて全くの罪人であり、無力であると自覚するからこそ、神の御手の中に戻り、神を求め、神が必要であることを祈りもって告白することができると思える。しかし、祈ることは、単に神に自分の願いを聞いてい

ただただでなく、神がどのようなお方なのかを思い巡らし、信じることでもある。したがって、この論文では祈りを「人と神との人格的な交わり」と定義する。

② 私たちが祈るべき方である神について。

神を知ることは、祈りにおいて重要なことだ。そのため、神を知ることについて考察した。聖書に記されている通り、神が全知全能であり、主権者であり、人格的存在であることを信じ祈る時、確かに神がこのようにお方であると人格的に知り、さらに祈りに進むことができることを考察した。

また、三位一体の神の祈りにおける役割について見ていった。イエスは祈りの教師であり、どのように祈りを教えて下さっているのかを考察した。イエスの名で祈ることと、祈りの大祭司イエスについても考察した。続いて聖霊について考察した。聖霊は、私たちが祈るよう導き、また祈る者の姿を示してくださっている。さらに、祈る私たちを整え、とりなしてください。

③ 祈る者の姿勢について。

神理解を考察したうえで、祈る者の姿勢がどのようなべきかを考察した。神は心をご覧になられるため、口と心を一致させ、へりくだり、心を注ぎだして祈る必要がある。またそこには、必ず信仰が必要である。不信仰ゆえに祈りにおいて不安になって

「祈りとは何か 一祈る者の姿勢と神理解一」

藤田 夏穂

研究動機と目的：私自身が信仰生活の中で感じていた祈りの難しさを解決したいという思いや、祈りを知らない者であると感じかされたことから、弟子たちのように「祈りを教えて下さい」という思いが与えられた。そして祈りに悩む人たちが祈りの豊かさを知ることが出来るように、本テーマを考察した。
研究方法：聖書、祈りに関する書物から祈りを学ぶ。



① 祈りの起源と定義について

しまうときも、神の存在と力と慈愛に信頼し、確信をもって祈る。それが信仰であり、信仰を持って祈る時、神は答えてくださるということを見た。

④詩篇の祈り

以上の点を踏まえた上で、実際的な祈りについて、詩篇の祈りを考察した。詩篇の中には多くの祈りが記されているため、文学様式に従って分けられた詩篇を各区分から1篇ずつ取り上げ、祈りを考察した。どの詩篇も、神に対する信頼と恐れをもって、賛美したり自分の心を注ぎだしたりしている。著者たちは神を見上げ、神がどのようなお方なのかを思い巡らしている。そして、祈りの中で神から力を受け、励まされ、再び立つことができている著者たちの姿を見ることができた。

結論

①祈りとは人と神との人格的な交わりである。

神を主とするとき、神を求め、へりくだり、心を注ぎだす祈りを行うことができる。祈ることにおいてさえ、人は無力だが、それを認めるとき、御霊が働いて祈ることができるようにされる。

②祈るべき方に対する認識と信仰はとても重要である。

聖書に記されている神は、今も変わらないお方であり、全知全能であられる。主権と人格をもって祈りに答えられるお方である。私たちは、この神にへりくだって祈るのだ。

③祈りにおける三位格の働きはとても重要である。

祈りは父なる神に向けられ、イエス・キリストの名によって御父に近づく。イエスは私たちが御父の御心に従って歩めるよう祈りを教えてくださっている。さらに聖霊が私たちの内に住み、私たちの姿を示してください。祈るときにはとりなし、教え導いてくださっている。

④祈る者の姿勢で大切なことは神に心を注ぎだすことである。

恐れと誠実さをもって、さらに信仰をもって祈るとき、神は答えてくださる。しかし、これらをもって祈らないならば、祈りは難しくなり、また間違った祈りへと進んでいく。

⑤神を仰ぎ見て祈ることを詩篇の祈りから教えられている。

どのような状況にあっても、ありのままを神の御前に持っていき、神を仰ぎ見るなら、神は助けと喜び、平安を与えてくださる。そして神の栄光を賛美するように変えられる。このように、祈りとは神と人との人格的な交わりであると分かる。

「戦時下のキリスト者の動向」

堀口和基

私は大学生の時に近代日本史を専攻していた。その際に20世紀の戦時中における様々な資料を読み、戦争の無意味さや悲惨さに胸が痛んだことを今でも覚えている。それから5年程が経過したが、憲法改正の動きが少しずつ進んでいることからわかるように、現代は昔の時代に戻ろうという機運が高まっている。そのような時代において、過去の戦争の時代にキリスト者であった人たちが取った行動や主張を調べ、そこから現在、未来に必要なものは何かを調べるのが、この論文の目的である。



第一章では天皇制と戦争についてまとめた。この時代を語るにおいて、天皇制とキリスト教は切り離すことのできない関係にあったからである。調べていく中で、この両者の関係性を語る上で特に大きな意味を持ったのは、教育勅語であるという結論に至った。

これは1890年、大日本帝国憲法が施行される前に出されたものであり、国が出した法令・文書ではなく、唯一絶対の存在である天皇が直々に国民に対して出した言葉であった。政府の意向に左右

されることのない言葉であり、その影響は大きかった。なぜなら天皇の名のもとに、諸国との戦争やアジア地域の植民地政策などのあらゆることが正当化されたからである。

教育勅語の考え方やキリスト教の考え方が対立した時、多くのキリスト者は二つの相反する考え方の間に立つことになった。完全な解決を導く方法は二つあった。一つはキリスト教の信仰と国家の忠誠が矛盾するものではなく、両方に従うことができるという論理を見出すことで解決する方法である。そして二つ目は、その状況に納得することができず、キリスト教を放棄するという方法であった。そしてキリスト教を放棄すると結論付けた人は国を優先し、教会を去った。当時の資料には、教育勅語前後の六年間の受洗者・信仰告白者は、更に前の六年間と比べておよそ半分程度になったという記録が残っている。

第二章では、日本基督教団の成立過程と戦争協力について調べた。1939年に出された宗教団体法により、様々な宗派が存在していたキリスト教も合同せざるを得なくなり、これによって天皇が日本の諸宗教を統治するという体制を受け入れたことになった。そして合同後、教団の人々は宮城礼拝や神社参拝を行った。そして日本が植民地化した国に教団から人を派遣し、日本に協力的態度をとるようになるための働きも担っていた。

このように、国の方針に抗うことなく全面的協力をしていったのである。

第三章では、内村鑑三という個人をフォーカスして、彼の生い立ちと戦争に対する考え方についてまとめた。幼いころから武士道を重んじていた内村はキリスト教徒となり、神(Jesus)と日本(Japan)という「2つの J」を重んじた人であった。(この考え方が、有名な不敬事件へと繋がっていった)

内村は一般的には非戦論者であったと認識されているが、彼の著作を見ると初めから非戦論者ではなく、むしろ日清戦争の時には「義戦(正義のための戦争)は存在する」と唱えた熱心な主戦論者であったと書かれている。しかし日清戦争後、義戦というものがないことに気付き、非戦論者(彼の言葉を借りるなら、戦争絶対的廃止論者)となったのであった。



今回、この論文を執筆する機会が与えられて導き出した結論は、物事を正しく見る目が必

要ということである。

大日本帝国憲法で宗教の自由が明記された時、当時のキリスト者は喜んでいて、それは日本の歴史を振り返ってもわかるように、キリスト教は多くの弾圧を受けてきたからである。

しかし「天皇主権の下に」宗教の自由が保障されたという最も注目すべき点に目を向けることはできなかった。

また第三章で日清戦争の後の国内の動きをまとめているが、この当時に事実を伝えている新聞は一つもなかったという内村鑑三の証言がある。私たちはメディアの情報という一方向だけで物事を判断するのではなく、歴史を見るのと同じように一次資料を調べ、信頼できる発信源から情報を得て、全体を見て判断する必要がある。そして私たちは『剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。』(マタイ 26:52)とイエス様が言われた言葉を覚え、戦争に対しては反対の立場を公にすることが大切だと考える。

～神学校会計について～

諸教会の皆様の尊い献金に、心より感謝申し上げます。コロナ禍の中でも、こうして学校運営ができているのは皆様のお祈りと献金のお陰であり、主の豊かなお守りによるものです。

しかし同時に、財政的に非常に厳しい状況にあることも事実です。建物の老朽化が激しく修理費が毎年発生し続けていることと、学生不足(特にこの4年間は毎年入学者1名のみ)で、ずっと赤字状態が続いており、蓄えが減り続けているのです。このままですと、明確なことは言えませんがあと数年で底をつくところまで来ています。ですから、献身者が起こされることは勿論ですが、主の働き人を育成する神学校のために、諸教会の皆様の尚一層の献金を心よりお願いいたします。

神学校管理委員会 会計担当
長江忠司



～ 編集後記 ～

早いもので、卒業式から2か月余りが経ちました。今号の内容は、卒業式および卒業生の卒論要旨を中心としました。祝された卒業式の雰囲気、紙面を通して分かち合っていただければ感謝です。卒業生たちのために、今後の神学校の学びのために、続けてお祈りいただければ幸いです。

新年度は新入生1名を加え、学生5名でのスタートとなります。学生たちの学びと訓練の充実のために、またコロナ禍中における守りと支えのために、お祈り下さい。

(編集担当：加治佐清也)

新年度のスケジュール

入寮
……………8月30日(月)

作業週
……………8月31日(火)～9月3日(金)

入学式
……………9月6日(月) 午後2時

授業開始
……………9月7日(火)

伝道実習
……………10月12日(火)～15日(金)

オープンカレッジ
……………11月2日(火)～5日(金) 内2日間

クリスマス休暇
……………12月18日(土)～1月10日(月)

***新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては、変更の可能性があります。**

発行：日本バプテスト聖書神学校

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町
大字長倉 4696-27

TEL: 0267-46-4689

FAX: 0267-46-5203

Eメール: jbbf.jbbc@gmail.com

ホームページ: jbbc.jpn.org

郵便振替: 00180-1-700102